

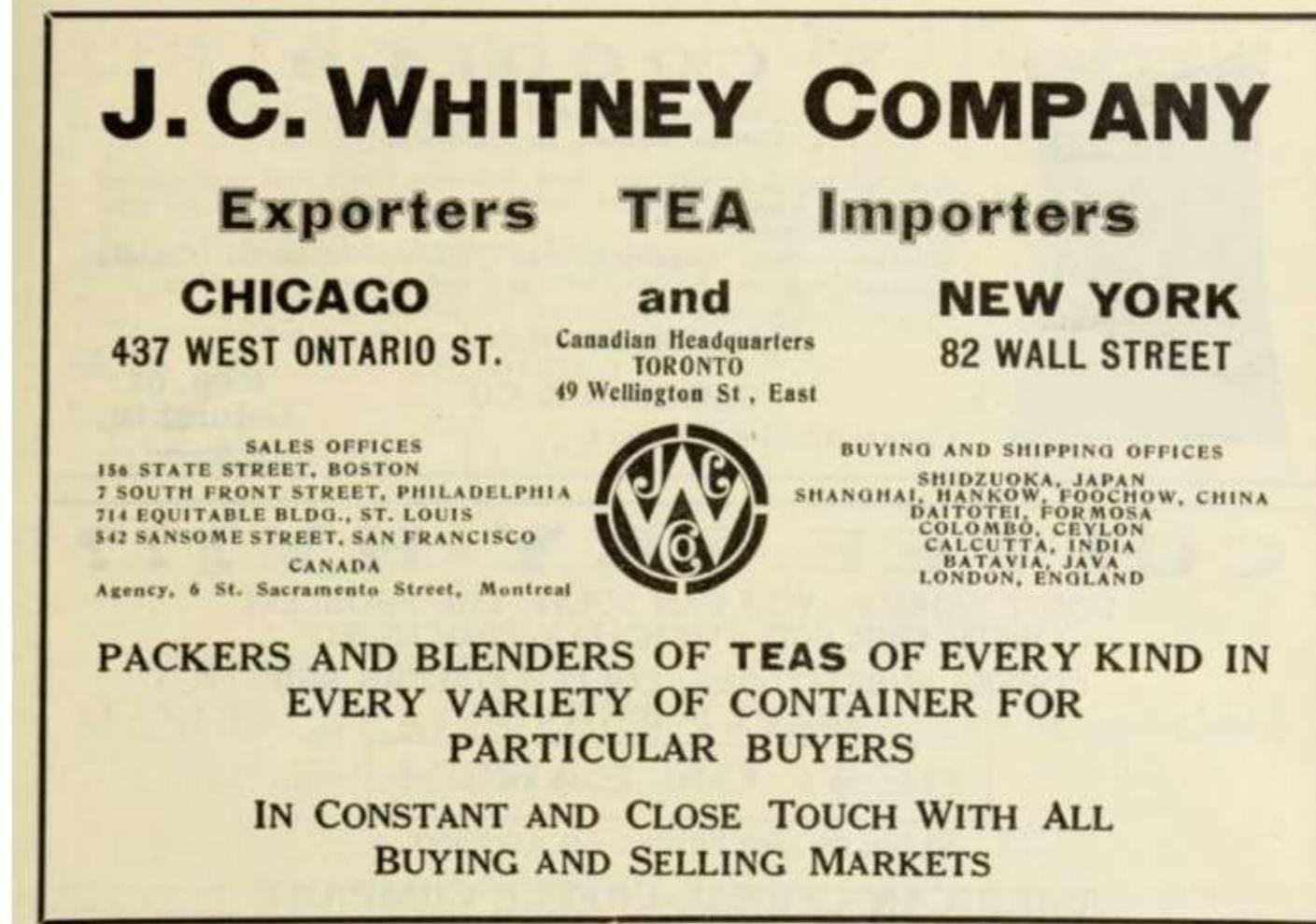
ホイットニー社とTea Talks

戸部 健（静岡大学学術院人文社会科学領域）



1. J·C・ホイットニー社について

茶の宣伝活動にはアメリカ合衆国のいくつかの茶貿易会社が協力しましたが、J·C・ホイットニー社もそのなかの一つでした。ホイットニー社はシカゴを拠点に世界中の茶を輸入していた業者で、静岡や台北、上海などにも事務所を構えていました。

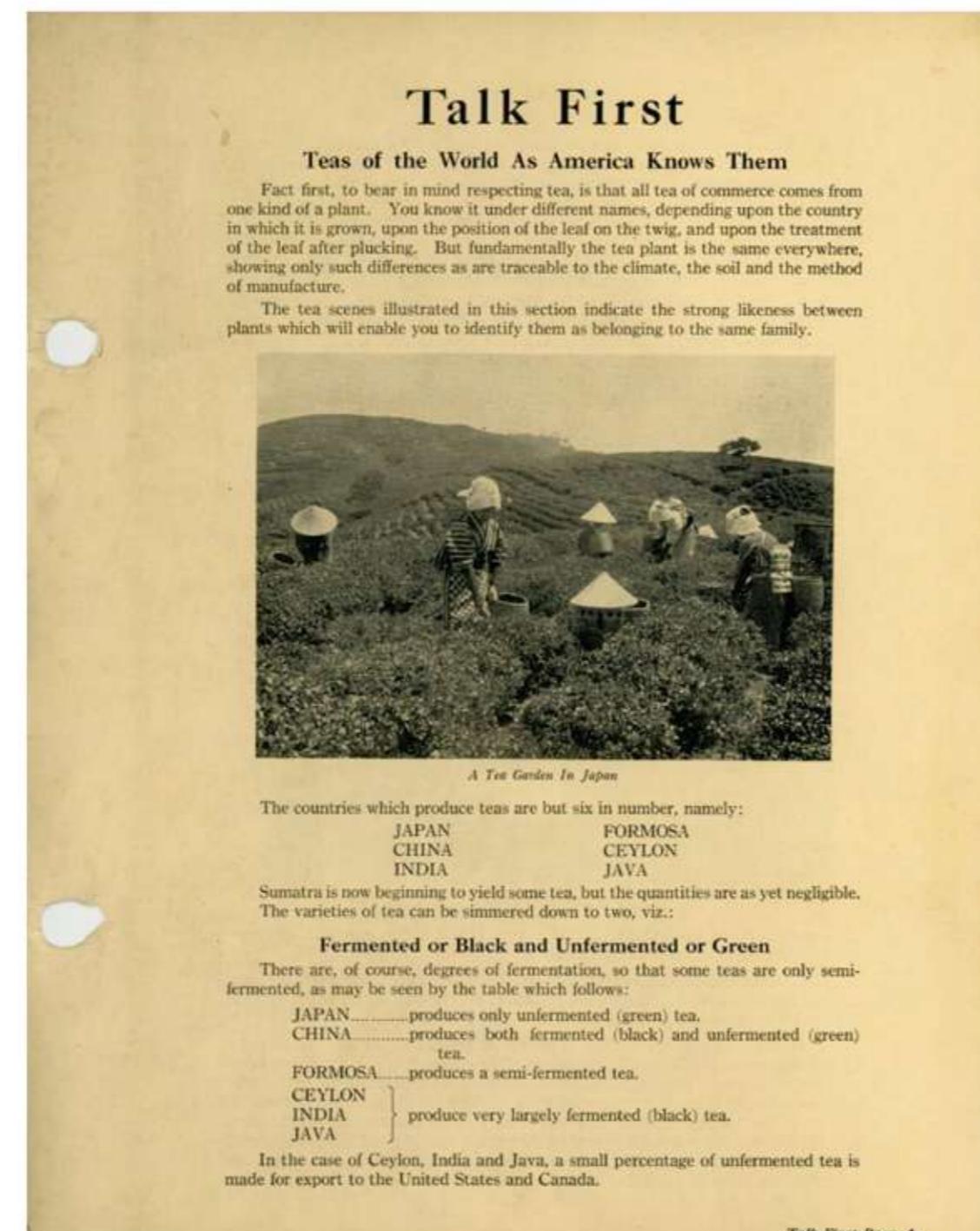


ホイットニー社の広告 (Tea & Coffee Trade Journal, September, 1919)

なお、同社は1924年にアーウィン・ハリソンズ&クロスフィールド社と合併し、アーウィン・ハリソンズ&ホイットニー社となり、アメリカで最も大きな茶輸入業者の一つとなりました。

2. 広報用パンフレット Tea Talks

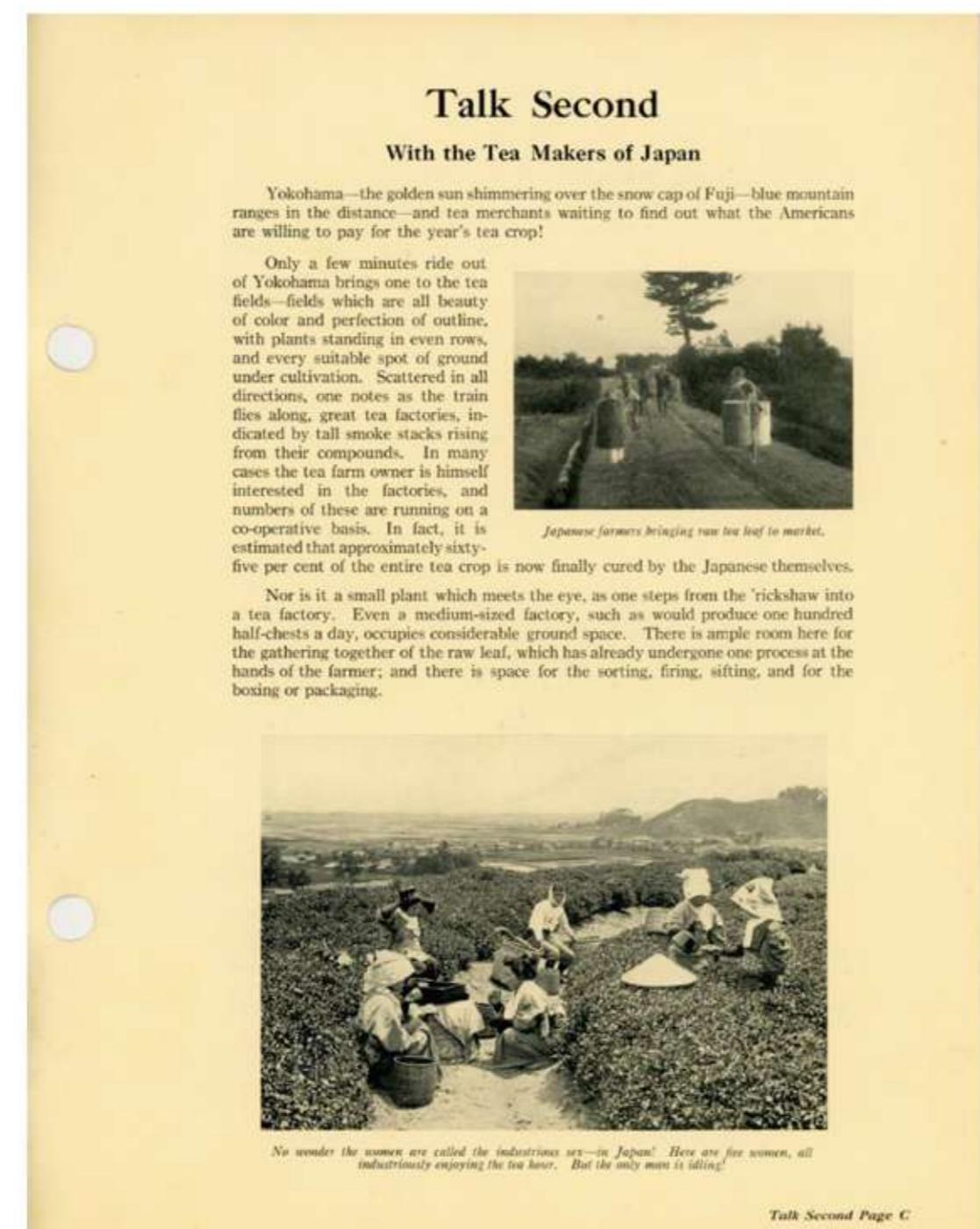
ホイットニー社は米国茶業協会などと同様、茶の多様性を宣伝することに積極的でした。そこで彼らは1919年以降、Tea Talksという広報パンフレットを不定期で発行するようになります。テーマは毎号違っていましたが、全号読めば世界各地で生産される茶や喫茶文化の違い、さらにはアメリカでの新しい茶の飲み方などについて広く知ることができます。



Tea Talks (Talk First 世界中の茶に関する概論)

3. 日本茶の紹介

Tea Talksの内容についてもう少し詳しく見ていきましょう。例えば第2号は日本茶特集号でした。茶畠での作業、蒸熱、火入れ、揉捻、篩いがけについての紹介が順になされ、最後に手作業による選別や箱詰め作業について、宇治や静岡を舞台に写真入りで説明されています。一読すれば、日本茶生産の独特なやり方が分かる作りになっています。



Tea Talks (Talk Second 日本茶特集)

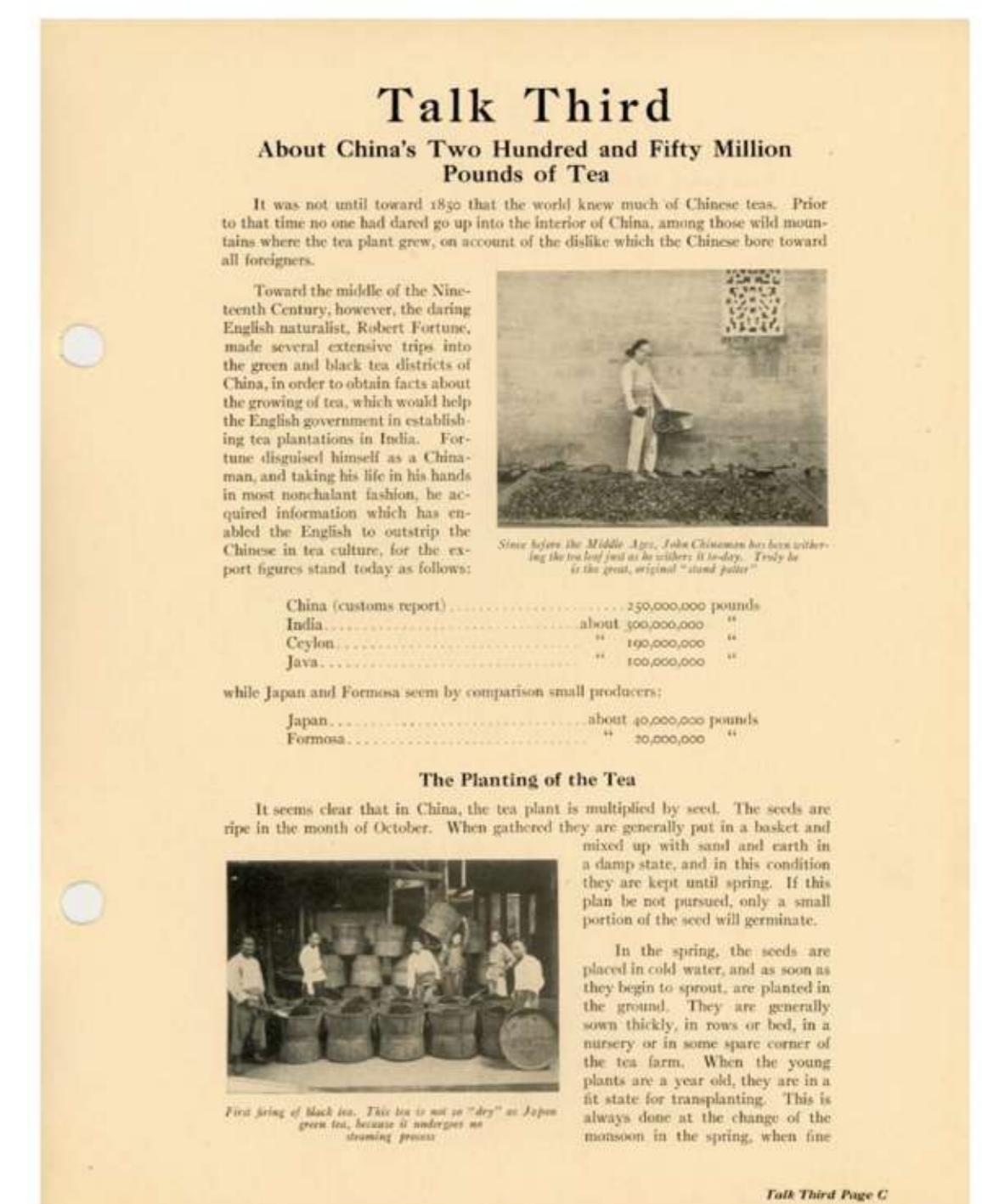
より詳しく知りたい方は

- 戸部健「J·C・ホイットニー社の広報パンフレット『ティー・トークス』(Tea Talks)について」『アジア研究』（静岡大学人文社会科学部アジア研究センター）17号、2022年。

4. 中国・台湾茶の紹介

第3号は中国茶特集です。中國茶の製法が緑茶・紅茶ごとに紹介され、着色茶の説明も見られます。掲載写真の一部は、その後ユーカースの大著 All About Tea (1935) にも使用されました。

他方、第5号は台湾茶特集でした。当時日本の植民地であった台湾で烏龍茶や包種茶がどのように作られていたのかがよく分かります。茶畠周辺に居住していた少数民族についても言及しています。

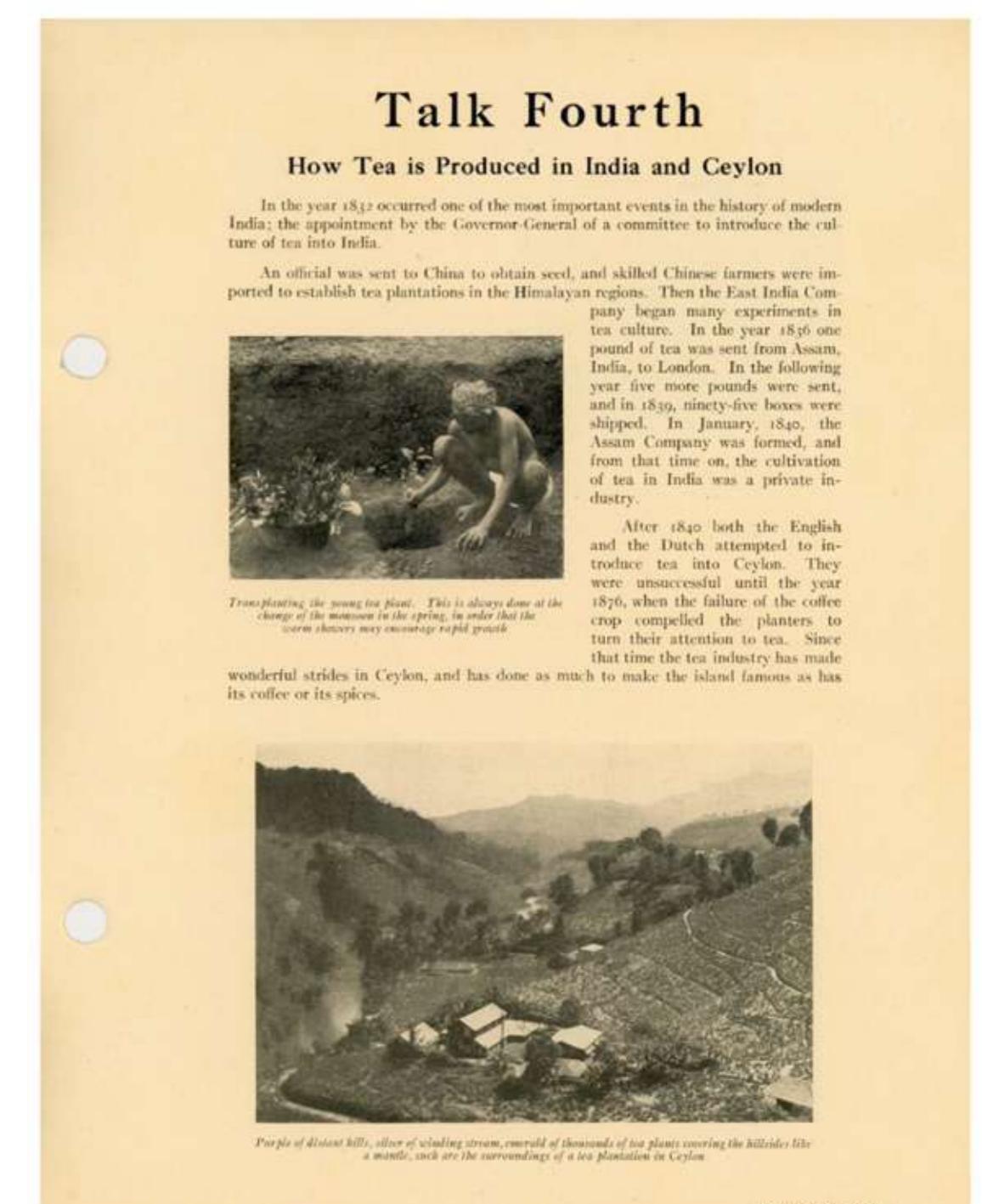


Tea Talks (Talk Third 中国茶特集)

5. インド・セイロン・ジャワ茶の紹介

第4号はインド・セイロン茶特集です。まず茶摘みの様子が紹介され、その後に紅茶の製造方法について、萎凋、揉捻、発酵、乾燥、選別、箱詰めに至るまでの流れが写真付きで丹念に紹介されています。清潔で機械化された環境で生産されていることがとりわけ強調されています。

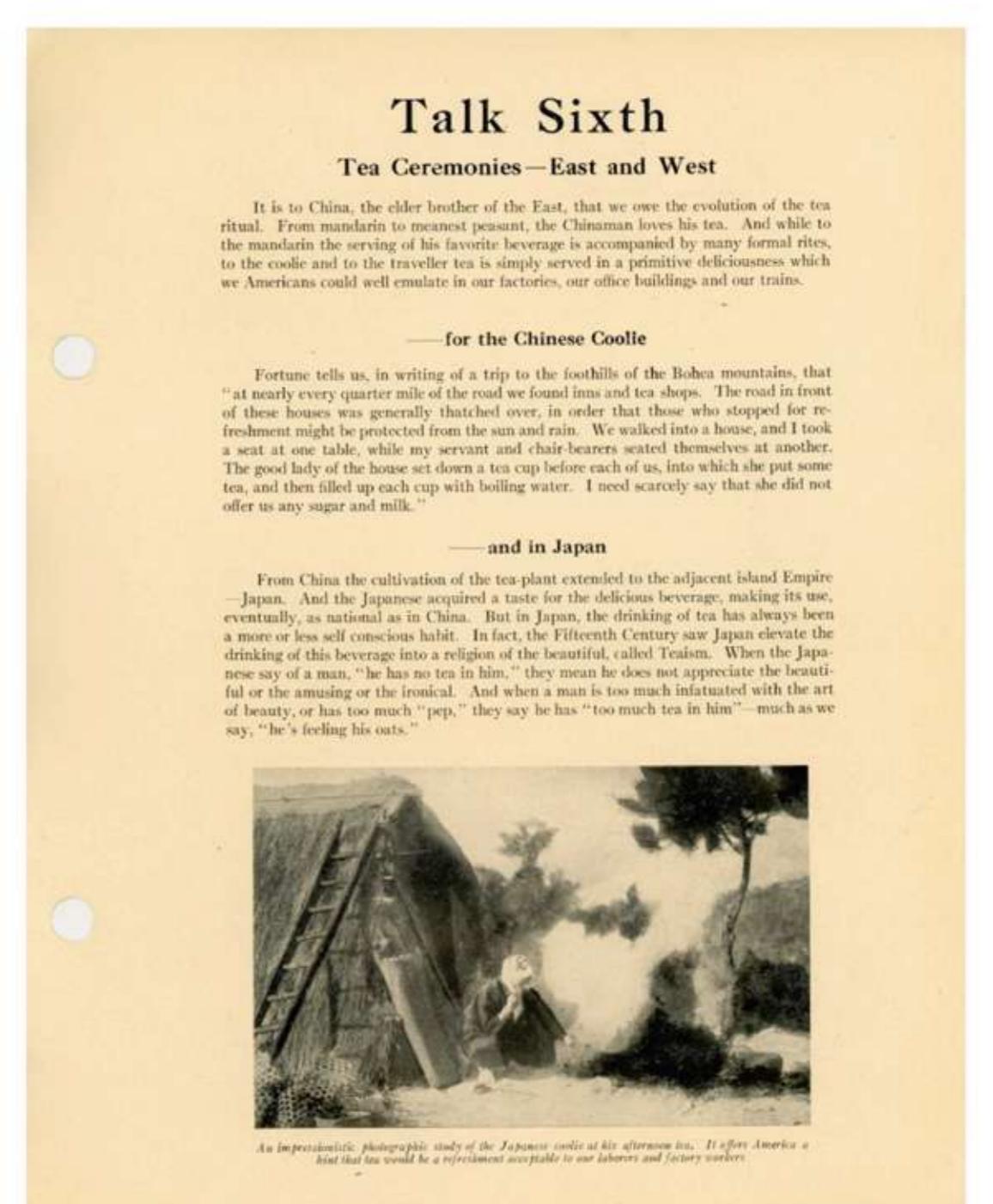
このほか、第10号ではジャワ茶の製造について詳しく述べられています。



Tea Talks (Talk Fourth インド・セイロン茶特集)

6. Tea Talksの影響力

Tea Talksの主な読者層はアメリカの小売店主や販売員でしたが、内容の一部は前のパネルで言及した茶関係雑誌にも転載され、多くの人に読まれました。ホイットニー社はこのような方法でアメリカ人に対して「バラエティー豊かな茶の世界」を“educate (教育)”しようとしたのです。こうした視点は、各国で生産された茶が様々な方法で消費されている現在にも通じるのではないでしょうか。



Tea Talks (Talk Sixth 東洋・西洋での喫茶法の違い特集)



こちらからダウンロード可能です→